

# 地獄に行った三人の男

## — 閻魔<sup>えんま</sup>の失敗 —

井田 安雄



むかし、むかし、あったとさ。

あるとき、医者と軽業師と魔法使いが一緒に死んだとさ。

それで、三人一緒にあの世へ行くことになったとさ。その途中、地獄と極楽の分かれ道があって、この世でいいことをした人は極楽へやられる。悪いことをした者は地獄へやられるちゅうだ。

三人とも地獄へ行ったとさあ。

そこに閻魔様がいて、まず医者が、

「おれは医者をして、人を助けただから、ぜひ、極楽へやってくれ」  
っていったとさあ。

そうしたりゃあ、閻魔様が、

「そんなうそをいって。おかしな物を薬だといって騙してくれて、娑婆中から銭集めた者は、極楽なんかへやれねえから、地獄へ行げ」

っていわれて、地獄へ行ったとさあ。

その次にこんどは軽業師が、

「おれは娑婆じゃ、いろいろ珍しいことをして、人を喜ばせたから、ぜひ極楽へやってくれ」  
っていったとさあ。

そうしたりゃあ、閻魔様が、

「そんな、人の目をごまかしちゃ、銭たんを集めたもんは、極楽なんざやれねえから、地獄へ行げ」  
っていったんだと。

軽業師も地獄へ行ったとさ。

こんだあ、魔法使いが

「おれは、魔法かけちゃあ、人を助けてきた人間だから、ぜひ極楽へやってくれ」  
っていったとさ。

そうしたら、閻魔様は、

「そんなうそをいっちゃあ、人の目はぐらかし、人の気をごまかした者は、はあ、極楽へやれねえから、地獄へ行げ」

といわれたとさあ。

そうして、医者、軽業師、魔法使いの三人が、地獄の方へめた行ったりゃあ、鬼が大勢いて

「ほれ、餌がきた。早く釜あ燃やせ、茹でて食うべえや」  
って、釜のげえ火い燃えつけたとさ。

そうして、三人を釜の中へぶっこんだりゃあ、魔法使いが魔法をかけたで、いっこう熱かねえ。湯は水になってしまった。

「ぬりいなあ、こんなぬりい湯じゃ駄目だ。いますこし沸かした方がいいから、火燃やしてくんろ」  
っちゃ、いったんだと。

鬼どもは、

「こんなもなあ、はあ茹でて食うわけにやいかねえから、針の山へ追い上げて殺して食うべえ」  
っていったとさあ。



そして、針がたんと置いてある山があって、そこへ三人を追いあげたりゃあ、こんだあ軽業師が綱を向う山へ投げて、そして、「ああ、ここは景色がいいなあ」  
っていいいな、その綱を渡って行くだで、針山でも駄目で、「こんなもなあ、どうしたって仕方ねえ。一人ずつ丸呑みにすべえや」  
って、鬼が三人を丸呑みにしただと。



そうしたりゃあ、こんだあ、医者が腹くだしの薬をみんなに持たせて吞ませたりゃ、鬼の腹の中に下し薬をまいたりゃあ、ガラガラガラって、鬼のはらわたまでみんな下ってしまった。鬼どもは難儀で、難儀でどうしようもねえで、ショウドカワ(ショウヅカ)の婆さんがち(家)があるちゅうで、そこへ行って、

「婆さん、婆さん、閻魔さんにとんだ与太もんをよこされて、腹わたまでみんな下ってしまっ、腹が減って難儀でならねえ。何か食うもんがあったらくれとくれ」  
っていったんだとさあ。



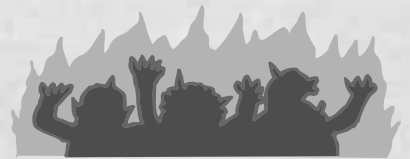
そうしたりゃあ、ショウドカワの婆さんが、「今、ぼた餅があるから、焦がしてやるから待ってる。すべ  
てえ(冷たい)で駄目だから焦がしてくれるから待ってる」  
って火燃やして、その上でぼた餅めくとめてくれただとさあ。



そうしたりゃあ、鬼どもは腹が減って、いっこう腹がぺこぺこでいらねえ。腹が空だから、何か腹にたまるもんが食いてえ。ショウドカワの婆さんの着ていたボロの半天を、三人の鬼どもが、むしっちゃあ食い、むしっちゃあ食い、婆さんの半天の綿を、三人の鬼どもがみんな呑み込んでしまったとさ。

そうしたりゃ、そのぼた餅のげえ、<sup>おま</sup>燻がくっついていたのを、<sup>おま</sup>燻を取らねえで鬼が呑み込んだりゃあ。腹の中へ入って、綿のげえ火がついていて、鬼がみんな焼け死んでしまったとさあ。

それで、今は、地獄へ行っても、鬼ちゅうもんがいなくなったとさ。  
はあ、それっきり。



## あとがき

(話し手 吾妻郡六合村入山字根広 中村けささん 大正7年生まれ 「カケス通信」31号引用 昭和61年12月所収)

中村けささんは、とても信心家の方で、よく宗教色の強いおはなしをしてくださった。

けささんの生まれ育った六合村入山は、昔話の宝庫といわれたところで、多くの昔話の名人があられた。けささんも、その「語り一族」のおひとりであった人である。

けささんは、本誌(前身の「群馬の国保だより」を含めて)には二度目のご登場。

今回のお話は、「閻魔の失敗」という題で全国的に分布している昔話。「群馬の国保だより」の第1号に伊勢崎市の徳江わかさんに語っていただいている。

けささんのお話の中には、鬼がみんな死んで、今の地獄には鬼がいなくなったとある。

そうすると、これからは鬼にいじめられないから、安心して地獄へも行けることになりそうである。昔話の世界ならではのおもしろい発想であるといえよう。

また、けささんの昔話には、方言を使っの独特の雰囲気がかもし出されている。やはり、声を出して読んでいただければありがたい。

なお、倉橋由美子さんの『老人のための残酷昔話』(講談社刊)の中に「地獄めぐり」という老夫婦の地獄ツアーの話が収録されている。こちらには、様変わりした地獄の様子が"残酷"に描かれている。